

全国化, グローバル化, 産学官連携

第13代会長 谷 吉樹



日本生物工学会が創立90周年を迎え活発な学会活動を展開されていることに先ず祝意を表したいと思いません。

私の生物工学会との関わり合いは、1973年に始まります。この年の8月以来、日本醸造工学会の編集業務が整理・組織化され編集幹事として編集業務に従事してまいりました。ついで、1991年に常任理事として企画を担当し、1992年の学会創立70周年事業の企画、運営に参加しました。日本生物工学会と改称され、技術賞が制定され、生物学実験書が発行されたのもこの時期でした。さらに、1999年に副会長、2001年からは会長として運営に携わりました。

この間の流れは、全国化とグローバル化として総括できましょう。発酵工学から生物工学に脱皮するとともに従来の東日本支部、西日本支部に加えて、関西支部、中部支部、九州支部、さらに北日本支部が1993～1997年に次々と設立され全国区学会としての基盤が築かれました。この間の各支部の中心になられた先生方の努力は今も敬意とともに思い出されます。グローバル化に関しては、海外会員制度の新設、韓国のバイオテクノロジー学会との交流、アジア賞の制定など主として東アジア、東南アジアをターゲットとした動きが活発に展開されました。大阪大学の生物工学国際交流センターの人脈が大いに役立ったと思います。また、アジアとの交流は他学会に先駆けたものでした。

会長時代の最大の事業は2002年の創立80周年記念事業でした。全国の会員のご協力で2000年4月に完成した大阪国際会議場（グランキューブ大阪）で盛大に行われました。なかでも、大阪大学の若手のスタッフの献身的な努力は印象的でした。また、記念事業を遂行するための資金集めに奔走していただいた実行委員のご努力も懐かしく思い出されます。お陰でさまざまな基金の設立にこぎつけられました。

さてこうして振り返ってみますと、編集幹事、理事、副会長、会長の30年間に今日の日本生物工学会の姿を形作る作業に参加できたことは充実感にあふれた思い出となっております。

学会の本来の使命は、会員にその存在意義を享受してもらうことでしょう。そのために、現執行部も努力を重ねておられ会員のニーズの把握とその具現化に努力されておられることは日ごろ感じているところです。現今の経済の状況は日本生物工学会のみならず多くの学術活動に多大の影響を与えております。それぞれの活動の財政基盤が根本からゆらいでいるとも思える状況です。正会員費、賛助会員費を中心とした収入に依存する活動は今後も好転するようには思えません。会員およびその周辺に対して、対価を要求できる事業を立ち上げる時期かもしれません。学会運営に経営的センスが必要でしょう。

さて、日本生物工学会はその名の通り工学の分野を中心としております。工学の意味は広く解釈されますが、基本的には、社会のニーズに応えるべき分野と言えるでしょう。しかしながら、ニーズ対応型の研究のみでは時代を先導することは難しいでしょう。

個々の研究者の知性、好奇心に基づく研究が生物工学の世界を大きくすることに留意すべきと考えます。産学官それぞれのミッションの下に行われている研究活動が交流・融合シノベーションを生み出す場として機能することが望まれます。学会運営の中心メンバーに産・官からの参加が多いのが本学会の特徴のひとつでしょう。文理融合も今後のテーマとなると思います(生物工学, 84(6), 2006)。国公立大学の法人化以降、研究費獲得が目的化している動きが大きくなっていることが最近気になっていることです。